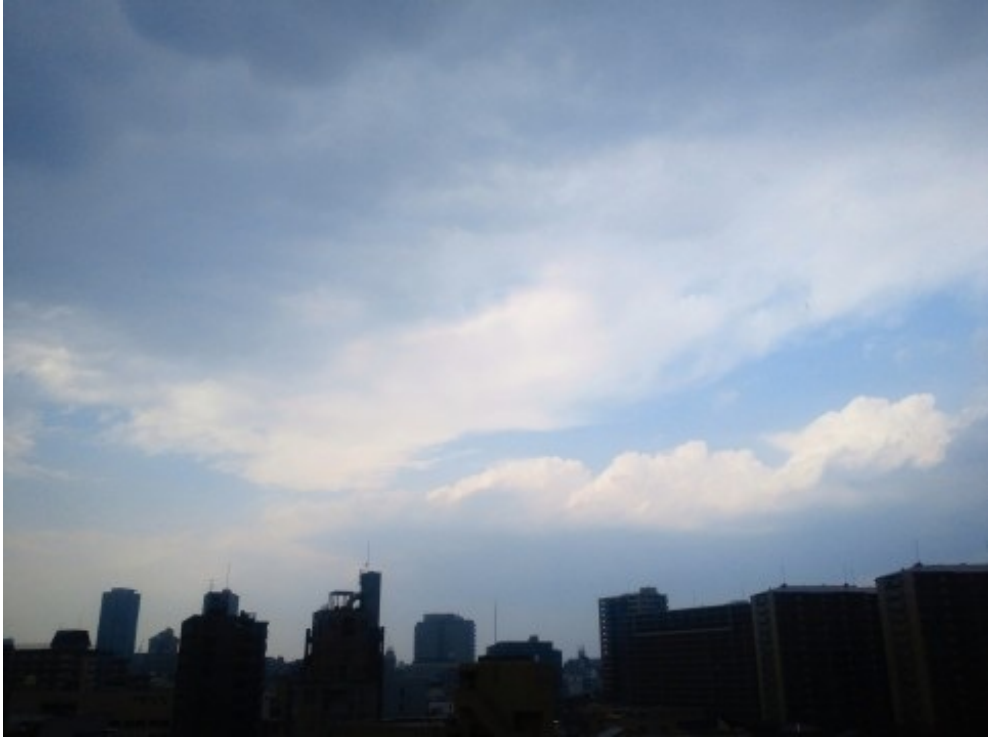

本の影

Book of Common Prayer / The Ewan

０時をまわったのを確認して、冷蔵庫から昼間に買っておいた缶ビールを取り出す。

折り畳まれた服が積み上げられ、その山頂に一冊の本が置かれていた。

いつぞや読んで、適当にそこらに置いたのだろう。

忽然と視界に現れたその本は、服の柔らかさの中に沈んで、ぽつねんと座っていた。

しばし私は視線を固定し、目を細めその全体を眺めた。

「なんと超然とした姿か」

姿勢は硬直し、頭の中が空洞化するのを感じた。

神棚の菩薩に手を伸ばすように、畏怖の塊となった右手で本を取った。

ゆっくりそれを右脇に抱え、換気扇のある近くまで向かった。

壁にもたれ、そこでようやく先ほどの缶ビールを開けた。

二、三口呑み、頭だけ出ている本のしおりを見つめた。

マイルドセブンに火をつけ、「よし」と小さく声を吐いた。

０時５分。換気扇の下。立ち読みが始まった。

半時間ほど経過すると、一旦、服の山頂に元あったように本を座らせた。

そして、ずかずかと部屋へと向かい、ぶつけるように両膝を布団の上に当てた。

およそ背中のあたる箇所だけシーツを伸ばし、レンタルビデオ店で先日取ってきた求人誌を枕元から乱暴に端に寄せた。

「汚い雑誌だ」と思った。

再び台所のほうへと戻って本を手にとり、いそいそとまた布団へと向かった。

素早く回転するように仰向けになり、蛍光灯に向かって両腕を突き出して本を広げた。

蛍光灯は本の面積で隠れ、顔の上に四角い影が映った。

本の輪郭から明かりがこぼれ、暗く影になった文面の奥を私は見つめた。

「一体この向こうには何があるのだろう」

ふいに泣きそうになるのを奥歯を噛み締めて堪え、強張った表情で一行目に焦点を合わせた。

一文一文読み進めながら、「俺は人生に負けたのか？違うだろう？俺はきっと勝てるんだ。俺はきっと勝つんだ」と何度か心の内で思った。

あの日、終息に向かって先細りしてく未来を俺は見た。

同時に、それに真っ向から対峙する文学を俺は知った。